



腹膜がん

(ふくまくがん)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

腹膜がんについて

腹膜がんは腹膜から生じたがんと考えられています。さまざまな定義がありますが、現在は、漿液性腺がん（病理分類の1つであり、卵巣がんに最も多いタイプの組織型）で腹腔内に腫瘍があっても、卵巣や卵管に原発となるような病変がない（すなわち、卵巣がんや卵管がんではない）場合に腹膜がんとして診断されています。卵巣がん、卵管がん、腹膜がんを合わせた中で腹膜がんの占める割合は10%から20%とされています。

症状について

腹膜がんは卵巣がんや卵管がんと同様に検診が確立していません。また、腹腔内の病気であるため、早期では症状が出ない、という特徴があります。進行すると腹水貯留による腹部膨満感（お腹が張った感じ）、腹腰痛、不正出血、排便の異常などを感じます

診断について

腹膜がんは開腹または腹腔鏡による腹腔内の観察、子宮全摘術、両側卵巣と卵管の切除、骨盤や傍大動脈リンパ節生検または郭清、大網切除、腹腔内の腫瘍切除を行い、病理学的に検索を行い、確定診断がつかます。また、進行期も決まります。「腹膜がんの疑い」で手術を行った後に病理学的に卵巣や卵管に原発巣と考えられるような病変があった場合には、手術後に「卵巣がん」「卵管がん」と診断が変わることがあります。

治療について

腹膜がんは卵巣がんや卵管がんと同じ治療を行います。腹膜がんの初回治療は手術による診断と腫瘍減量術（主に腹腔内の腫瘍を完全切除することを目的とした手術）と抗がん剤が主な治療となります。しかし、腹膜がんは卵巣がんと同様に進行して見つかることが多いため、最初に手術を行うことができないことも多いです。「診断について」であるように、臨床診断として腹膜がんを強く疑う場合には、術前化学療法（手術を行うことを目的とした手術前に行う抗がん剤治療）を行い、手術ができる状態になったら、手術を行います。手術の後には抗がん剤治療を行います。

